

地方で盲導犬と生活すること

——地方在住盲導犬ユーザーへの調査に基づく予備的考察——

桑畑洋一郎

1 はじめに

1.1 本研究の目的と社会的背景

本研究は、地方都市在住の盲導犬ユーザーへのインタビュー調査に基づき、いまだ手薄な盲導犬に関する社会学的研究——それもとりわけ、地方都市で盲導犬と共に生活することの意味に関する社会学的研究——を、今後展開するための論点を析出するものである。そのことにより、地方都市における盲導犬ユーザーの生活実態をめぐる諸研究を今後展開するための、基盤を形成することを目的とする。

本研究で取り上げる盲導犬は、介助犬・聴導犬と一括して、「補助犬」と呼ばれる。正確には「身体障害者補助犬」（厚生労働省 2025）と呼ばれ（ただし本研究では、これ以降この包括的概念を用いる場合は補助犬と表記する）、「身体障害者の自立と社会参加に資するものとして、身体障害者補助犬法に基づき訓練・認定された犬」（厚生労働省 2025）のことを指す。2025 年 4 月時点で、補助犬の実働頭数は全国で 876 頭であり、内盲導犬が 768 頭¹⁾とその大半を占める（厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部 2025）。

盲導犬 768 頭の内、首都圏（東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県）には 220 頭、山口県には 16 頭がおり（厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部 2025）、盲導犬とそのユーザーは、おおむね人口と比例して各地に居住していると思われる。ただし、視覚障害者の数は、全国で 273,000 人おり（厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部 2024: 5）、もちろんすべてが盲導犬等を必要とする障害程度ではないと推測されるものの、盲導犬ユーザーは視覚障害者の中では圧倒的に少ない。

そのため、後述するように、盲導犬と共に暮らすこと、とりわけ地方都市において盲導犬と暮らすことの実態把握はほとんど行われてこなかった。しかしながら、これも実際にインタビューデータを通して見ていくように、盲導犬と共に暮らすことは、現在ユーザーである人々の生活上必要なことであることに加え、視覚障害者の一部の生活の可能性をさらに拓くものでもあると思われる。にもかかわらず、盲導犬と共に暮らすうえでの困難が、とりわけ地方都市においては複数生じている。盲導犬と共に暮らす視覚障害者という存在がごく少数であっても、そうした人々もまた、地方における地域社会の構成員であることには違いない。またそうした

構成員の生活を困難にする状況も存在するのであれば、それを分析し、そうした困難を生み出している背景を考察することも重要となろう。

こうしたことに鑑みて、本研究においては、地方都市在住の盲導犬ユーザーへの調査に基づき、地方都市において盲導犬と生活することが持つ複数の意味を考察することにつなげるための、いくつかの論点を提示することとしたい。

1.2 盲導犬とは

盲導犬とは、視覚障害者の生活と移動を補助する存在である。諸説あるものの、盲導犬の育成は、第一次世界大戦で失明した軍人のために、軍用犬育成の方法が応用される形で 1916 年にドイツで盲導犬訓練学校が設立されたことに起源があるとされる（日本盲導犬協会 2025a）。その後世界にも拡大し、1929 年にはアメリカに育成団体が、1931 年にはイギリスにも盲導犬協会が発足した（日本盲導犬協会 2025a）。現在は国際盲導犬連盟²⁾ という国際組織も結成されている。

日本には 1938 年に盲導犬が紹介され（日本盲導犬協会 2025a）、1939 年にドイツからきたシェパードが、やはり戦争で失明した兵士のために導入された（日本盲導犬協会 2025b）。1967 年に日本盲導犬協会が設立され、今に至る（日本盲導犬協会 2025c）。

法的には、1978 年の道路交通法改正により、第 14 条で「目が見えない者（目が見えない者に準ずる者を含む。以下同じ。）は、道路を通行するときは、政令で定めるつえを携え、又は政令で定める盲導犬を連れていなければならない」と定まった際に、盲導犬に関わる規定も盛り込まれることとなった。また、盲導犬そのものについては、2002 年施行の身体障害者補助犬法（「補助犬法」）により規定されている。なお、同法第 7 条から第 11 条においては、国等が管理する施設や、公共交通機関、あるいは不特定かつ多数のものが利用する施設、事業所または事務所において、著しい支障が生じる恐れがある場合やその他のやむを得ない理由がある場合を除いて、身体障害者補助犬の使用を拒むことができないと定められている。

1.3 先行研究の検討と本研究の意義

以上のような存在である盲導犬ユーザーと盲導犬であるが、先行研究については非常に乏しい状況にある。身体障害者補助犬学会（2005 年設立）という学会があり、同学会の会員が学会誌に論文を投稿しているものの、多くが犬の訓練方法や、犬の動物学的・生態学的研究、あるいは補助犬利用者のリハビリテーション方法、または補助犬に関する啓発に向けた研究が多く、本研究が主題とする、盲導犬ユーザーの生活実態についての研究は非常に少ない。

そうした、限られた状況ではあるが、本研究と近い関心を有する研究もある。例えば、水越ほか（2022）による、飲食店従業員に対する、補助犬受け入れに関する意識調査を元にした研究である。水越らは、飲食店のアルバイト学生を対象としアンケート調査を行い、補助犬法を認知している回答者は半数に満たないものの、受け入れると回答した者が8割近いこと、また、受け入れの可否に関わらず、他の客の理解と衛生面の部分で不安を抱える者が多いことを指摘した。同様に、三浦ほか（2022）は、医療機関における補助犬受け入れ状況について、看護部長対象のアンケート調査を実施した上で過去の調査と比較をし、受け入れ状況にそれほど変化がないことを指摘した。さらに倉澤・三浦（2016）においては、国際線での航空機移動の際、各航空会社が補助犬対応をどのようにしているのか、調査によって明らかにしている。結果として、回答のあった会社の内3/4の会社が同伴可能としていることが示された。その他住宅（甲田・松中 2013）や医療行為の場面（三浦ほか 2013）、あるいは災害時の避難所（田中・沼田 2024）のように、様々な施設・場面においての受け入れ状況に関する調査も実施されてきている。以上のように、補助犬法が定められている中でも、それほど同法への認知は完全には広がっておらず、また、実態としても、生活上の場面によっては十分な受け入れが実現しているわけでもないことが示されている。

また、やや異なる角度の研究もある。山川（2018）は、盲導犬ユーザーへのインタビュー調査を元にして、犬と暮らすことの意味を、心理的効果の測定を行いながら明らかにしようとした。結果、ユーザーにとって盲導犬はコンパニオンアニマルとして存在しており、ユーザーは盲導犬と暮らすことでポジティブな心理的効果を得ることとなっていた。こうした研究からは、盲導犬と暮らすことが、視覚障害者にとって、白杖生活とはまた異なる特有の意味を持つことが明らかになった。

以上のように、本研究と関心を共有する研究もあるが、一方では、盲導犬と暮らすことの実態と、その意味については未解明な状況である。先に、諸施設での受け入れ状況をめぐって受け入れ側の調査を行った研究については参照したが、受け入れ状況をめぐって盲導犬ユーザー側が行っている対応についての研究は存在しない。また、盲導犬と暮らすことの心理的効果を明らかにした研究はあるが、同居主体が盲導犬であることに特有の意味があるのかどうかも明らかになっていない。つまりは、盲導犬ユーザーが盲導犬と暮らすこと、およびそのことが社会において有する意味の研究はほとんど手つかずの状態にあると言える。

しかしながら、特定の人々が、自身の暮らす地域社会において、自身の生活様式への拒否も経験しながら、何とか生きていくために編み出す生活上の実践を研究することは、社会学的に重要な意義を持つ。そのことは、例えば脳性麻痺者の会である「青い芝の会」が、地域生活を

継続していくために、場合によっては周囲との葛藤も経験しながら様々な実践を展開してきたことを指摘した荒井（2017）など、枚挙に暇がない。健常者中心主義の社会（山下 2008）で生活する障害者等、多数者の論理で形成された社会に暮らす少数者は、そうした社会で様々な困難を抱えつつ、困難を解消するために社会にも働きかけている。また、盲導犬ユーザーではないが、白杖を用いながら歩行する視覚障害者が特有の技法を習得していく過程については研究が蓄積されてきている（例えば（秋谷・佐藤 2014；秋谷 2016；西澤ほか 2016）など）。こうしたことと同様に、やや論点先取にはなるが、盲導犬ユーザーも展開している諸実践や、生活のために修得した技法を明らかにすることは、社会的に意義深いことであろう。

また加えて、盲導犬ユーザーは、「犬」という、自身とは異なる——しかも人間には非ざる——主体と共にありながら生活を展開している、特有の生活様式をもつ人々である。この点で、介助者との関係に着目した従来の障害者研究（例えば（前田 2009））とはまた異なる示唆が得られる可能性がある。さらにはそこから、盲導犬ユーザーと盲導犬とが暮らす地域社会のあり方の構想にもつながる示唆も得られよう。

そうした今後の研究全体の展開も見据え、本研究においては、盲導犬ユーザーへのインタビュー調査の分析を行いながら、研究を今後展開すべき論点をいくつか提示することとしたい。そのことによって、今後の研究の基盤を築くことを目的とする。

2 分析

2.1 調査の概要

既に述べた通り、本研究は、インタビュー調査のデータを用いながら、今後展開すべき論点を提示することを目的とする。

本研究では、盲導犬ユーザーの男性（以下「A さん」と表記。1960 年代前半生まれ。山口県在住。県盲導犬ユーザー当事者団体メンバー）のインタビューデータを用いる。インタビュー調査は、2024 年 6 月 21 日に実施したものであり、今後本研究をベースに、同氏への追加調査と他の盲導犬ユーザーへの調査を重ねることとしている。

なお、A さんにはインタビュー時に録音することと、研究にインタビューデータを使用することへの了承をいただいている。

以上を踏まえ次節からは、A さんのインタビューデータを基に、失明をした後山口県内で盲導犬と暮らすに至った A さんの経験を時系列的に眺めつつ、今後の論点を析出していくこととしたい。

2.2 事故による失明と、中途失明者としての人生の転換

Aさんは、高校2年生の時にバイク事故で完全失明となった中途失明者である。ただし、失明直後はそれほど大きな衝撃はなかったと語る。以下、失明時を回想するAさんの語りを引用したい。なお、亀甲括弧内は筆者の補足で、丸括弧内は筆者の問いかけである。

世の中の見方として、「目が見えなかったら何もできない」というやっぱイメージを持ちちゃう。僕は交通事故で失明したんですよ。それまで全然五体満足な体してたんですけど、やっぱそんな時〔失明前に〕に障害者を見た時に、「目の見えない人大変やろうな」とかちゅう、「やっぱ見えんと何もできんやろうな」とっていう、何かそういうのがあったけど、自分が視覚障害者になってみて、いやもう全然、世界がそんなにもできないというわけでもなくて、逆に何でもチャレンジするっていう。(中略) よく「目が見えなくなって、ショックだったでしょう」と言うけど、僕には何のショックもなかったですね。

ただしこうしたことは、Aさん自身にとってみると、自身のパーソナリティの特異性に起因すると理解されている。Aさんは、他の中途失明者の経験と照らし合わせながら以下のように語る。

僕はバイクで、前方不注意の車に、交差点で突っ込まれて。(中略) もうその…事故した時点で両眼球破裂なんで、目は見えてないはずなのに、寝れば夢を見るんで、自分の見えてないってことに気がついてないんですよ。治療の痛いのは分かってるんですけど。もう、2月ぐらい経って、目のガーゼ交換でガーゼを外したときに、「そう言われてみりゃ明かりも何も感じないな(笑)」ちゅうので。次に回診に〔医者が〕来たときに、「先生、僕の目はどうなってるんですかね」と聞いて、「あんたもう、眼球はないから、もう見えんよ」つつて。失明宣告された時に、「ああそうですか」「なら、さあこれからどうしようかな」みたいな感じで(笑)。他の中途失明の人に聞くと、やっぱ「3日3晩泣き明かした」とかやっぱ「自殺も考えた」とかって。多分それが普通やと思うんですけどね(笑)。僕は全然なかったし。退院してから、リハビリ、生活訓練ちゅうので、歩行訓練とか点字とか。当時はまだそんなまだワープロもない時代やったんで、タイプライターですよ。手紙を、友達なんかにタイプライターでやったり。いろんなそこで生活訓練っていうとき、逆に楽しかったんですよ。「こんなことするんや目の見えない人は」つつて。

こうした経緯で、Aさんは中途失明したものの、衝撃や悲嘆はなく、むしろそれどころか、「目の見えない人」の生活技法を取り入れていくことについて「こんなことするんや」と「逆に楽しかった」とする。

「楽しかった」の内実としては、失明前には体験もしなかった鍼灸の技法と点字の読解などがまずは挙げられる。

楽しいって、まあそれ〔鍼灸〕は医学の勉強、基礎医学で、それ医者と一緒にのことを、とりあえず最初に体のことを全部勉強するんですよ。「そんなことまでうちらは勉強せないかんの」ちゅうぐらいに、体の隅々までやるんですけど。(中略) 国家試験もあったりするので、勉強大変やったんですけど、その前にやっぱり点字っていうのを覚えて、点字自体は点の組み合わせで、ローマ字みたいなもんでね。母音があって、それに点を1つ足すかでカ行になったりサ行になったりってなってくる。「なるほどな」と思ったけど、今度それを指で読むとなると大変なんですよ。指先の感覚が。で、その訓練場はa県〔関東地方〕にあるんですけどね、(中略) そこでやってね。当時はぼちぼちそのコンピューターのプログラマーっていうの職業に出てきて。何か、針灸、按摩とかっちゅうのは、なんかやっぱちょっと暗いイメージがあったんで(笑)。「コンピュータのプログラマー、そっちへ進もうかな」みたいないろいろ考えてたときに、指導の先生から「高校は途中やから、とりあえず高校だけは卒業しといた方がええよ」っていうことで、ちょうどうちの父の仕事の転勤の関係で、b県〔中部地方〕の方に行って、b県の盲学校に入って、高校もういっぺん1年からやり直したんですよ。そのときに、その学校の方の勉強を、今度は点字の本を読みながらとかつつって、触る感覚で勉強せないかんっていう。それはちょっと必死大変やったですね(笑)。50音だけなら、それまで生活訓練では点字の50音、アルファベットぐらい習ったんですけど、アルファベットABCを覚えてても、学校の本、教科書は読めないんですよ。っていうのは、略字〔点字の縮約表記法(文部科学省 2023)〕っていうので書いてあるんですよ。(中略) 図なんかも点画っていうて、点で図が描いてある。そういうのも、触った感覚でやるけど。「いや、もうなんか全部一緒に感じるけど」(笑) みたいなね。

(でも、やっぱりプログラマーじゃなくて、針灸っていう風に〔Aさんは鍼灸院を開業している〕。)

〔訓練場には〕鍼灸の勉強する生徒さんらもいて。なんか針での治療っっちゃうので、部屋にも来てもらってて。治療してる姿を見て、「何かすごいな」と思って、ちょっと興味が。（中略）見てるうちに、「人の体の体治療するっっちゃうのもいいかもしれんな」っていう。

このように、点字と鍼灸、また、結局修得することはなかったがプログラミングなど、失明前には触れたこともなかった技術に触れながら、失明者としての技法をAさんは身に付けていった。こうした技法の中でも、失明前と大きな変化があったもの——かつ盲導犬とも関わるもの——が白杖歩行である。

2.3 新たな移動技法の修得——白杖歩行

前項で見たように、Aさんは交通事故で失明し、その後失明したからこそその技術を修得していくこととなった。しかしより根源的に生活に関わるものも、失明によって新たに修得する必要がある。典型的なものが歩行の技法である。

Aさんは失明後、まずは白杖歩行の技法を習得することとなった。白杖歩行の技法を習得するのは、事故から回復した後の「訓練場」でのことであった。

（Aさんちなみに、最初白杖に慣れるまでは大変でした？）

慣れるまで、その杖の使い方、まずその訓練場自体が、ものすごい建物が大きいんですよ。（中略）その中をまず自由に歩けることから。手すりはずっとついてるんで、手すり伝って歩く分には何も障害物はないんですよ。手すり伝いながら、建物の中自由に歩けるようにすることから始まって。で、卒業試験として、訓練士の先生の腕につかまりながら、どっかに連れてかれるんすよ（笑）。もう分からないように、くるくる回されたりして方向が。「はい、ここから何階の何とかちゅう教室まで行ってください」と。それで「ここはどこなんやろ」つつつ。で、とりあえず手すりを伝えながら歩いて、何か目印になるもの探すんすよ。で、（中略）最後その言われたとこに到着したら一応合格。それを2回ぐらい繰り返したかな。それをできたら、ようやく白杖を持たしてもらって、立ちながら白杖の突き方を、左右に足幅の間隔でリズムよくやるっっちゃうのをやって、建物の中をそれで歩くようになって。建物が歩けるようになったら今度外へ出て。まだ敷地内なんですよ。敷地内も広いんで、敷地内に信号があつたりするんすよ。そこで信号の渡り方とか、いろんなそういうのをやって、それができたら今度外へ出られて、駅まで行く。駅まで行けるようになったら、今度電車に乗って。（中略）電車の乗り方とか、ドアの探し方とか、いろ

いろそういうのやるんですよ。達成感ですよ。あ、目見えんでもいけるやんつつって。

(中略) それをもうやっぱりもう、行けるようになった時に、あ、「目は見えんでも全然いろんなど行けるやん」っていうので。(中略) それからb県でもそうですし、c〔bの後移住した地域。関西地方〕のときもそうやって出歩いたりいろいろしとったけど、今考えるよう行とったなど。

以上のように、おおよそその歩行技法が修得された後は、施設外で電車を利用して駅に移動するといった形で技法の熟練が進められることとなった。なおこうした技法の熟練は「目は見えんでも全然いろんなど行けるやん」とAさんが語る通り、施設外で1人でも移動が可能であるという自信を持たせる効果も大きいものであったと思われる。

こうして、白杖による移動を新たにAさんは修得した。ただしさらにその後、白杖で長期間(2020年ごろまではほぼ20年ほど)移動していたAさんは、盲導犬ユーザーとなる。

2.4 移動技法の変更と新たな修得：盲導犬のユーザーとして

Aさんは2020年ごろから盲導犬ユーザーになった。盲導犬を利用し始めたきっかけは以下の通りである。

(何で白杖歩行から盲導犬についていう風にされようと。)

友達がユーザーになって1年目で。最初は「いやあ、盲導犬大変やろ世話が」みたいな。いろいろ最初の内は「大変やな、自分には絶対無理や」とか思ってたんですけど、ちょっと見てる間に、あれなんか、楽そうかなっていうのを思い始めたときに、盲導犬の講習みたいのがd〔施設名〕、e駅〔山口県内の駅名〕の。あそこであつたときに、その友達が参加してて。で、朝どっか遊びに行くのに、「eおるんやったらdに行くから、そっから遊びに行こうか」っていうことで。d行った時に訓練士さんと会って。その時にいろいろ話聞いて。で、「盲導犬どうですか」って〔勧められた〕。いや、「動物が好きやから、もうかわいがっちゃって駄目やと思いますよ」って言うたら、「いや、かわいがっていいんですよ」っていう話になって。「え、そうなんです？」つつって。そらハーネス付けて、歩いてるときは、仕事中的時はある程度厳しくせないかんけど、「帰ってきて、ハーネス外したら、もう全然かわいがっちゃっていいんですよ」つつって。「あ、そうなんです？」みたいな。自分の知ってる知識と、なんか少しずつ違ってきて。で、なら一度訓練所の方に、f県〔訓練所のある県。九州地方〕にあるんですけど。「体験もできますんで良かったら」というこ

とで。ちょっと行ってみようかなと思って行ってみたら、訓練もまあ、こんな感じでやって、もう朝から晩まで訓練するんじゃないくて。午前中の訓練言ったって、とりあえず朝起きて、餌をあげて。んでうちらはご飯、朝食食べてその後に（中略）農道往復して、それで終わりなんですよ。それでまた車に乗って帰ってきて、「午前中訓練これで終わりです」って。「あ、これだけ？」みたいな。午後からも、もう同じような感じでやって。次の日はちょっとコースを変えてみたりっていうので。その中で電車の乗り降りの仕方とか、そういう指示の出し方っちゃうのは、その中で少しずつやってって。

以上のようにAさんは、友人が既に盲導犬ユーザーであり、友人との関係の延長で訓練士と知り合うこととなった。当初は盲導犬をかわいがってはいけないのだろうと思い込んでいたものの、訓練士からそうした思い込みを否定され、「一度訓練所の方に」行くこととなった。

またこれ以外にも、Aさんが盲導犬ユーザーになった理由がある。盲導犬の方が移動が容易であるという点である。

訓練士さんの話で聞いたときに、ここ〔Aさんの自宅〕からe駅まで歩いても行っちゃうんですけど。（中略）「Aさん、家からe駅までどれぐらいかかります、歩いて？」つつって〔訓練士が尋ねるので〕、「そうっすね、まあスピードにもよるんですけど、1時間はかからないと思うんですけど」って言うたら、「盲導犬と歩いたら、その半分で行けますよ」って言うから。「いや、それはないやろ白杖も結構歩くの早いよ」とか思ったけど。いや今そうやって、AA〔盲導犬の名前〕と歩いてて、いやそれはもう、半分まではいかんとしても、それに近いぐらいの時間で行けますね。っていうのは、白杖歩行というのは、探りながら歩いてるわけですね。ここから行くときに、ここ家を出て、ガードレールを伝ったり、溝があってそれを探りながら、ここで伝いながら行ったらゴンと電柱が当たって、ならそこを今度右へ曲がって、行ったら鉄板があって…とかって、何か目印目印を探りながらずっと行くわけですね。だけれども盲導犬と歩くと、ストレートでずっと行って、そろそろ右へ曲がるころかなと思ったら、もう「ライトコーナー」で指示出せば、ぴゅーと右に曲がってるわけですね。確認せずに。だからそうですね、確かにもう全然早いですね。（中略）だから今白杖歩行を使ってる人にも、「盲導犬もらったらどう」って言うけど、やっぱりみんな返ってくる答えは以前、私が言ってたように、「いや世話がようせん」とか、「なんか大変そう」みたいな。「いや白杖の方が楽や」みたいな。

このように、白杖歩行の方が移動が容易であるという思い込みを A さんは持っていたが——またその思い込みは白杖を使用する視覚障害者に共有されていることのようにだが——、それはむしろ逆で、盲導犬と共に移動の方が圧倒的に容易であった。この点も、A さんが盲導犬ユーザーとなった理由として挙げられる。さらには、盲導犬との移動の方が、安全性も高いと A さんは語る。

都会はないですけど田舎はやっぱ溝が多いですね。溝に落ちたり。あの AA と一緒に溝にはまったことはないですけど、白杖歩行のときに溝にはまったりしたことありますし。やっぱ日本は電柱が多いから、電柱に当たったり、盲導犬とおればぶつかることはないんですけど、そういうのにはね。

さらに加えて、盲導犬との移動では、白杖とは異なる特有の移動感覚が生じると A さんは語る。

白杖歩行から盲導犬の方に変わって一番変わったのは、やっぱり声をかけられることが多くなったちゅうね。「おはようございます」とかね。やっぱ犬がおるのもあってですね、声をかけられることが多くなったですね。〔声を〕かけやすいんでしょうね。そういうのもありますね。それと、今まで歩いてて、一緒に犬と、AA と歩くようになって、「こんなに犬を飼ってる家が多いんや」っていう。やっぱり犬は分かって吠えるんですよ。今連れて歩いてると、何も感じなかったけど、歩くようになったら、家の中から吠えるんですね、犬が。「この家も犬飼ってるんや」「この辺を犬飼ってるんや」つつて。結構多いですよ犬飼ってる家が。

（ある意味では生活する空間の風景というか、見え方がちょっと変わって。）

そうですねはい。それも何か歩行のときの目印じゃないですけど、曲がり角になると手前の家の、ちょっと離れてはいるんですけど、犬が必ず吠えますよ。向こうから分かるんでしょうね。

このように、白杖歩行の場合よりも道行く人々とのコミュニケーションが増加したことと、犬を介して生活空間の光景の変容が生じ、生活上の新たな「目印」を獲得したことが、盲導犬との移動によって生じた感覚の変化であると A さんは語る。

また他にも、「犬」という意志を持った主体であるがゆえの生活感覚の変化もあるようである。

今 AA と生活するようになって、「AA 俺の言ってることわかってんのかな」って思うことがやっぱ多々ありますね。こっちのやりたいと思っていることを。(中略) 日常の行動を見てるから。「多分こういうことを今しようとしてるんやろな」とか「したいんやろな」っていうのが分かるんでしょうね。

こうした、被介助者である A さんの行動を先回り／先読みして行動する点が、白杖歩行では生じない、盲導犬との生活で生じる感覚なのであろう。

2.5 盲導犬への拒絶と、それへの対応

以上のように A さんは、盲導犬ユーザーとなったことが、自身の移動と生活に正の変化をもたらしたと語る。しかし一方で、先行研究でも注目されてきた、生活上利用せざるを得ない諸施設での拒絶も同時に経験することとなった。そうした経験をめぐる語りを列挙すると以下のようなになる。

今年〔2024 年〕の 4 月にも g〔山口県内の地域〕行ってラーメン屋に入ろうとしたら、「ちょっと」っていうんで。

何軒か行ってた食堂で、「ここって盲導犬はどうなんですかね」って言ったら、何軒かは「うちはちょっと」って言われたから、もうそれから行ってないんですよ。「AA と一緒に行っても多分断られるやろな」と思って。

今までも「A さん、病院行ったら断られたんです」ちゅうから〔当事者団体の他のメンバーがそう言うから〕。(中略)〔病院に経緯を確認したところ〕たまたま対応した看護師が、そういうのは知らなくて、「もう犬やから」ちゅうので断っちゃったちゅうことなんで。(中略) 病院自体は知ってるけど、看護師とかがそういうスタッフ向けの人らが知ってなくて。「動物はお断りなんです」みたいな。

このように、飲食店や医療機関での拒絶を経験することはあると A さんは語る。こうした拒絶は、補助犬法も、そもそもの補助犬の存在もそれほど認知が広がっていないことが背景にあると A さんは認識している。

補助犬法っていうので、入店、同伴拒否をしてはいけないとはなってるんですけど。そういう補助犬法のことをみんな知らないっていうか、あんまり周知されてないっていうのもあるんでしょね。

こうした傾向は、A さんによると、山口県のような地方の方が強いとのことである。

今うちの息子が h [関東地方] にいるんですけど、そういう向こうのあれを聞くと、やっぱ向こうは都会だと、噂っていうんですかね、そういう盲導犬を拒否して、あそこ補助犬拒否しよったみたいな。それはネットで。今の言い方すると「バズる」って言い方するんすかね、なんかそういうので広がったりして。

ただし拒絶された場合に、A さんは補助犬法に基づいて受け入れを要求することはない。とはいえ、何も反応しないわけでもない。まずは拒絶の理由を尋ねると A さんは語る。

「いやいいですけど、理由を聞かせてもらえますか」って言ったときに、やっぱ「店が狭いから」っていうのが 1 つの理由。と、例えば、ラーメン [先の g のラーメン屋の話の流れなので] の中に毛が入ったとか、何かそういうことがあったときに…ちゅうことですよ。例えば、よくわかってない人であれば、その盲導犬が他のお客さんに噛みついたり、何か危害を加えたり、店の中を壊しちゃったり何とかがって、それをされたら困るっていうのも理由の 1 つに入ってますね。

こうした語りからもうかがえるように、A さんは拒絶に対して抗議等を行うのではなく、徐々に知ってもらうことを意図しつつ、当事者が直接何かをすることは避けようとしているとする。

断られたときに「補助犬法知らんのか」つつって、「盲導犬断ったらあかんねんぞ」みたいなので、強引に入る人も中にはいるんですけど。まあ、それもええかもしれんけど。「そこまで強引に入って、食べて美味しいです？」つつって (笑)。それよりは、補助犬法のこ

とは教えた方がいいんですけど、リーフレットがあるんで、それを手渡して、あとは、「できれば断る理由を聞いてもらえませんかね」つつって。なるほど我々が直さないかんこともあるかもしれない。(中略) 完全にまた対話っていうのが基本なんですよねもう。

「補助犬法があるから」つつうことを、一方的じゃなくて、向こうの断る理由も聞いて、「そうですか」って。そこであんまり言っちゃうと、口論になったりしてもあれなんで、そこは理由を聞いて下がって、あとは県の支援課の方に届ければ、支援課の方から電話指導してくれますのでね。

同様の観点から、補助犬に受容的な施設と拒絶的な施設を明確化するような方策にも、Aさんはやや否定的な姿勢を見せる。

うん。i〔山口県内〕の方〔自治体職員〕が、(中略) i のお店、「ここのお店は盲導犬 OK」「ここは駄目」みたいなそういうマップを…とかってというのは、何か市の方が「やりましょうか？」って言うてくれたけど、それは会長〔Aさん所属の盲導犬ユーザー当事者団体で、以前会長を務めていた方〕が、「いやそれはもう盲導犬拒否を助長することになるから、そういうことはせんでくれ」っていうことで断ったらしいですよ。

Aさん自身の対応ではなく、所属する団体代表の方法を語りながらではあるが、こうした、拒絶に対しては柔軟に対応しながら、「対話」によって状況を改善していく方策を、Aさんや、Aさんが所属する当事者団体では採用しているようである。

3 考察

以上に見てきたように、盲導犬ユーザーとして生活することは、視覚障害者の中でも特有の様式や感覚と共に過ごすことであり、また、周辺の人々からの拒絶を経験しながら、それと付き合い／向き合いつつ過ごすことを意味していた。

それでは、こうした地方都市の盲導犬ユーザーに、特にどういった点で注目すべきなのか。今後研究を展開する上での論点となりうるものを指摘し、今後の研究につなげることとしたい。

第1には、地方都市ならではの盲導犬との歩行技法の検討である。本研究でも少し触れた、白杖歩行者の技法の研究が示すように、視覚障害者は、視覚障害があるがゆえの歩行技法を習得している。しかしそれとはまた異なる技法を盲導犬ユーザーが習得していることも、Aさんの語りからは示唆される。加えて、Aさんの語り内にあるように、溝の設置のされ方や電柱の

建てられ方、あるいは盲導犬と移動するがゆえの認知地図の変化など、地方都市で盲導犬と暮らしていることに特有の、移動技法が存在する可能性がうかがえる。こうした、地方都市で盲導犬と暮らしていること特有の技法を、白杖歩行の研究と同様エスノメソドロジカルな手法に基づいて研究することに可能性があるろう。

第2には、地方都市ならではの拒絶の実態の検討と、そうした拒絶への対処方法の検討である。これもAさんの語りが示唆するように、「都会」と地方とでは盲導犬に対する拒絶のありようが異なるし、そうした拒絶への対処方法もまた異なっている可能性が高い。こうしたことを、Aさんはじめ当事者への調査を元に検討することもまた可能性を有している。

第3に、こうした、ごく少数といえども確実に存在する、生活上の困難を抱える人々に対応した今後の地域社会の姿を、Aさんが示した困難も踏まえながら構想することである。ただしここには難しさもあり、ここまで引用したものとは異なるが、Aさんが

車椅子の人が外に出たときに、「点字ブロックが邪魔」やちゅう声も聞くんですよ。それは当然かもしれんつって。(中略)「ただし」うちらあれ「点字ブロック」がないと、目印として、歩けないっていうのはあるんですよ。(中略)「逆に」うちらも段差っていうのがある程度目印にしてるわけですよ。だけど「あれ、ここにあった段差は？」つつたら、「いやスロープになった」つつってね。車椅子の人のために、それは逆に、目印が、車いすのスロープ作ることによってなくなっちゃってるっていうのもあって、それは本当お互い様なんですよ。

と語る通り、特定の立場の人々にのみ適合的な地域社会を作ることが求められているわけでもなく、また、最大公約数的な地域社会の構想でも不足がある。困難な構想ではあるが、あらゆる人々の地域生活を可能とする地域社会の構想を、ぎりぎりのところまで検討するヒントが、Aさんの語りから導き出されよう。

以上のように、Aさんら地方都市で盲導犬と暮らす人々の経験を通して、検討すべきポイントが複数ある。これらの点を今後、調査を重ねながら解明していくことが課題となる。

[注]

1) 介助犬が57頭、聴導犬が51頭。

2) 1989年の設立当初は国際盲導犬学校連盟。詳細は<https://www.igdf.org.uk/>を参照。

[文献]

- 秋谷直矩, 2016, 「歩行訓練における地図の習得プロセス——視覚障害者歩行訓練のエスノメソドロジー」『ソシオロギス』40: 133-155.
- 秋谷直矩・佐藤貴宣・吉村雅樹, 2014, 「社会的行為としての歩行」『認知科学』21 (2): 207-275.
- 荒井祐樹, 2017, 『差別されてる自覚はあるか——横田弘と青い芝の会「行動綱領」』現代書館.
- 甲田菜穂子・松中久美子, 2013, 「住宅業者における身体障害者補助犬法の周知と補助犬の受け入れ」『日本補助犬科学研究』7(1): 21-25.
- 厚生労働省, 2025, 「身体障害者補助犬」(2025年7月4日取得, https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaisahukushi/hojoken/index.html).
- 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部, 2024, 「令和4年生活のしづらさなどに関する調査(全国在宅障害児・者等実態調査)結果」(2025年7月4日取得, https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/seikatsu_chousa_c_r04.pdf).
- , 2025, 「身体障害者補助犬実働頭数(都道府県別)」(2025年7月4日取得, https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/7_4.pdf).
- 倉澤悠維・三浦靖史, 2016, 「国際線航空会社の身体障害者補助犬への対応状況」『日本補助犬科学研究』10(1): 35-42.
- 前田拓也, 2009, 『介助現場の社会学——身体障害者の自立生活と介助者のリアリティ』生活書院.
- 三浦靖史・小林彩恵子・上田麻紗子・岸本美穂・橋本裕美・今田泰裕・藤井貴広・大槻史奈・豊田行健・石川智昭, 2013, 「透析施設における補助犬使用者の受け入れ状況」『日本補助犬科学研究』7(1): 26-33.
- 三浦靖史・田内璃子・森戸茉莉菜・西尾尚也・嶋田良介・倉澤悠維, 2022, 「医療機関における補助犬受け入れ状況——12年間での変化」『日本補助犬科学研究』16 (1): 74-81.
- 水越美奈・小野沢栄里・沼田芽久・藤野琴子, 2022, 「飲食店の非正規従業員に対する身体障害者補助犬受け入れに関する意識調査」『日本補助犬科学研究』16 (1): 60-66.
- 文部科学省, 2023, 「点字学習指導の手引き」(2025年7月10日取得, https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1340250_00010.htm).
- 日本盲導犬協会, 2025a, 「盲導犬の歴史」(2025年7月4日取得, <https://www.moudouken.net/knowledge/history/>).

- , 2025b, 「40 周年 (原点調査)」 (2025 年 7 月 4 日取得, https://www.moudouken.net/about/history/40th_study/).
- , 2025c, 「沿革」 (2025 年 7 月 4 日取得, <https://www.moudouken.net/about/history/>).
- 西澤弘行・南保輔・坂井田瑠衣・佐藤貴宣・秋谷直矩・吉村雅樹, 2016, 「視覚障害者と歩行訓練士の相互行為の中の触覚についての覚え書き」『現象と秩序』(5) 15-32.
- 田中奈美・沼田宗純, 2024, 「災害時の身体障害者補助犬ユーザーに関する課題分析を踏まえた自治体における対応業務の提案と業務フローの構築」『地域安全学会論文集』44・45: 131-141.
- 山川伊津子, 2018, 「中途視覚障害者が盲導犬と共に生きることによって生じる変容プロセス」『日本補助犬科学研究』12(1): 47-53.
- 山下幸子, 2008, 『「健常」であることを見つめる——一九七〇年代障害当事者／健全者運動から』生活書院.

所属：山口大学人文学部

E-mail : kuwahata@yamaguchi-u.ac.jp